



軍手たち

美容室【ロコ】の閉店間際、客が一人入ってきた。

「こんばんは。ご予約は頂いておりますか？」

「いえ」

美咲は店内を振り返る。その仕草は単なる習慣で、あまり意味はない。その日は終日雨が降っていたせいで人の入りが悪く、閉店の三十分前からすでに片付けの作業に入っていた。カウンターにいた美咲もまた、レジの締め作業に取りかかっているところだった。

「時間ぎりぎりにすいません」

「いえ、どうぞ奥へ」

あご髭をたっぷりたくわえた五十がらみの男の来訪に、美咲はいささか戸惑った。モスグリーンをつなぎに安全靴、軍手という肉体労働者そのものの出で立ちは、若者向けの美容室であるロコの雰囲気とはあまりにも不釣り合いだった。それにこれから散髪しようというのに、TOKIOの山口達也よろしく頭にタオルを巻いているのも納得がいかない。

ロッカーにおける厳正なるジャンケンの結果、担当は美咲の同期であるアイになった。が、彼女は男の背後に立つなり、すぐに戻ってきた。

「さっきカウンターにいた子がいいって。あの人、キャバクラと勘違いしてんじゃない？」その表情には安堵と、それ以外にも複雑な思いが浮かんでいる。何かあったらすぐに警察を呼ぶ、という確約を店長に得て、美咲はおそろおそろ店の奥へと向かった。男は椅子に深く腰掛け、鏡を見ながら両目の端にこびりつく、芋けんぴほど尖っている目やにを外していた。

「本日はカットで？」

取り敢えずケープをつけながら、美咲が尋ねた。

「……いや」

男はうつむいて、視線を合わせようとしなない。

「シャンプー、ですか？」

「君と、ちょっと話がしたくて」

美咲は即座に合図を出そうと、背後を振り返った。が、店長はアイとカウンターで話し込んでいる。結婚して半年、早くも夫婦間に険悪な空気が漂い始めたと日々愚痴る店長と、店のアイドル的存在でつい先月彼氏とケンカ別れしたアイ。二人は秘密にしているつもりだが、その関係は店の誰もが知っていた。

その時、男が言った。

「東堂可林さんですよ」

トウドウカリン、その響きに喉がくっつと締めつけられる。それはかつての彼女自身の名であった。首回りと背中に汗が噴き出すのを感じた。

「十年前、町田駅前の広場でよく歌ってましたよね。ギター一本で」

「ああ……まあ」

「今はもう歌われていないんですか」

美咲には男の正体がわかりかけてきた。正確には、思い出しはじめていた。

彼女がまだ路上で歌っていた時代。十人にも満たない数ではあったが、毎回ライブにかけつけてくれるファンが居た。口ぶりから察するに、男はその中の一人なのだろう。

「どうして辞めてしまったんですか」

「あなたに関係ないでしょう」

あまりにも不躰な物言いに、美咲は腹が立った。親でさえ気を遣って直接的には聞いてこなかった、少なくとも彼女にとっては丁寧に折り畳んで、掃除機で吸って圧縮して、押し入れにおさめた思い出であり、あかの他人には断じて触れてほしくない領域のひとつだった。

大学のサークル活動の延長、そのまた延長、延長で続けた惰性の夢。いつか誰かが言った「才能あるから続けてみたら」を唯一の頼りにして、路上の弾き語りとアルバイトの生活を三年は続けた。今となってはその言葉を誰が言ったのかも覚えていない。そもそも誰も言っていなかったのかもしれない。

辞めたきっかけは、路上で偶然以前のバンド仲間と出会ったことだ。ガスマスクを装着して狂ったようにドラムを叩いていた彼女は、幼稚園生くらいの男の子を伴っていた。隣には旦那も居た。

大丈夫、これ趣味だから。全然、そういうのは諦めてるし。

自然と口から出てきた言葉にいちばん驚いたのは美咲自身だった。ずっと辞めるきっかけを探していたのだと、その時はっきり気づいた。でなければ、「諦めている」と口にした時の、あの何ともいえない解放感に説明がつかない。

そうして美咲は音楽と決別した。楽器類は中古ショップに売り払い、バンドTシャツは普段着から寝間着に降格させた。

男は矢庭に立ち上がった。体の動きにあわせて焼酎の臭いがした。

「ぼくは……あなたの歌をずっと聴いてきました。どうして辞めてしまったんです。あなたの歌が僕の支えだった。僕はあなたの歌があったから今日まで生きて来れたのです。辞めるなんて勿体ない……勿体なさすぎる。あなたの歌が必要なんだ」

男は鏡越しに訴えかけると、ポロシャツのポケットから紙切れを出した。

横罫のルーズリーフに、ミミズの這うような汚い文字が並んでいる。文は四つのまとまりで区切られていて、それぞれにタイトルが冠してある。歌詞カードだった。

男はそれを美咲に手渡すと、両手でこぶしをつくり、胸の前で連ねる「餅吸い」のようなポーズをとった。おそらく、マイクを持っているジェスチャーなのだろう。白い軍手に口を近づけ、凍える手を温めるかのように大きく息をはいた。

【アンダンテ】

歩く早さで こっそり幸せになろう

物音のしない朝に

抜け出していく 君と二人で

ろくな場所じゃなかったと君はいう

「どうりでここには猫がない」

歩く早さで じゅうぶん間に合う

歩く早さでこっそり行こう

歩く早さでこっそりこっそり

湯河原へ

月に悟られぬようにと こっそり

夜を駆けていく 君と二人で

振り返ってみたら

オーケー 誰もいない

「オーケー 誰も私に気づいていない」

歩く早さで じゅうぶん間に合う

歩く早さでこっそり行こう

歩く早さでこっそりこっそり

登別へ

誰も知らないどこかへ

あるいは

熱海へ

【新しい神様】

新しい神様、ひとつください
いまが旬とききました

胸の底から拒絶反応を
あなたに感じています
お母さん
手編みの鍋敷きをありがとう
お母さん
赤と緑が交互に縫いつけられていて
この季節にぴったりです お母さん
この胸の隅で拒絶反応が起こっています
あなたにボヘミアンラブソディー
歌いたい日がたしかにあった

新しい神様、ひとつください
去年から安くなったとききました

お母さん
誕生年のワインをありがとう
でもぼくはお酒が飲めない
お母さん
ポップスのCDをありがとう
でもうちにはラジカセがない
お母さん
手編みの鍋敷きをありがとう
でも東京に冬はない
ここには神様がないから
明日しか祈るものがない

【しまりす】

おれにはわかっているぜ

大体ね かみくだくんだ
大きなものはね 持てないんだ

おれにはわかっているぜ
ツノがあるやつは 弱いんだ
貫いたら貫いたで あせるんだ

反逆がしたいなら おれを
肩にのせて行ってくれ
血が流れたら 誰だってかなしい

おれにはわかっているぜ
つねに まともにいるぜ
一回で伝わらないことが
百回でも伝わらないとは いわせないぜ

反逆がしたいなら おれを
肩にのせて行ってくれ
血が流れたら 誰だってかなしい

午前中に中島みゆきを聴けば
午後も中島みゆき
午前中にしまりすを見たなら
午後もしまりす

【大人】

大人になりたくなかったら
大人よりも立派になることだといったおじいさん
鼻の下がかぶれていた
薬を渡したら「マキロンしか信じていないから」と
断られた

さらば青春の光
なんて はるか昔をひっぱりだして大人
樟脳臭い服を着る

もうあの時の形じゃない 肩は
もうあの時の形じゃない 胸は

大人なんか信じたくなかった
カムフラージュのつもりで四五年経ったら
鼻の下がかぶれていた
薬を渡されて マキロンもないのに
断った

さらば青春の光
なんて とうに忘れてわりと大人
機能性で服を買う
もうあの時の形じゃない 腰は
もうあの時の形じゃない 夢は

さらば青春の光
なんて 本当はただの日常の光
壁にぶつかって私に降りかかる光
よろよろの
大人になるの

一曲目はアップテンポだった。どこかビートルズを思わせるメロディラインである。二曲目は転じてフォーク調。三曲目はしっとりとしたバラードだった。四曲目は、美咲には何のジャンルだか判別できなかつた。ボサノバ、あるいはポエトリーリーディングだろうか。ただ適当な言葉を呟いているようでもあり、ところどころ節をとっているようでもあった。

美咲は、いつの間にか床に座っていた。二曲目の途中で後ろから膝カクンをされたみたいに、その場に崩折れていた。喉が「風邪の時の喉」になっていた。

「大丈夫？ いま警察呼んだから……」

アイが美咲の肩を抱いた。男はもういなかった。歌い終わった隙をついて店長が背後から飛びかかったが、するりとかわされてあっという間に逃げられたのだった。

「何あれ……マジで気持ち悪いよ。本当に大丈夫？ なんか変なことされなかった？」

アイの瞳の中には純粋な好奇心しかなかった。

「なんか、変な歌うたってなかった？」

変な歌。確かにそうだと美咲も思う。

「……うん」

「何、あの歌」

「……知らない」

「マジで気持ち悪くなかった？　なんか」

「知らないっ」

それは嘘ではなかった。

男が歌い上げたのは、四曲とも美咲のまったく知らない曲だった。どれひとつとして聞いたことがない。歌っていたのは何年も前だが、自分の曲でない事ぐらいはさすがにわかる。

「……そりゃあ、そうだと思うけど」

いきなり声を荒げられ、愛子は呆気にとられていた。

美咲は視線を床に這わせた。椅子の近くに、一つに丸まった軍手が転がっている。照明のせいだろうが、それは驚くほど白く眩しく見えた。

「午前中もしまりすなら……午後もしまりす」

どうして自分が泣いているのか、美咲はまずそこから考えはじめた。